

創建

そうこん

巻頭言:サンジェイ パリーク・1

第27回JIA東北建築学生賞応募作品・2

新任紹介・3

研究発表/教室ニュース・4

2023・11・20 VOL. 58 NO. 2 (通巻184号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

かつて、インドに「Paath Sala」という文化があった。親が教育のために子を僧侶に預け、子どもたちはお寺に住み込んで修行を積む——というものだ。修行は布一枚の服に着替えることから始まり、そこでは貧富にかかわらず、皆が一様に邪念を捨てて一心に修行に打ち込んでいた。

37年前、日本大学工学部で学び始めた私は、指導教員である大濱嘉彦先生(日本大学名誉教授/工学部建築学科)と同じアパートに住みながら研究に励むことになった。当時、インドの学生もなかなかできない経験を、先進国の日本に来て「Paath Sala」体験できたのは貴重だった。19歳から25歳まで6年間、大濱先生と寝食を共にしながら研究活動にどっぷり浸かる生活の中で教わったことは数え切れず、それらは私の礎になった。

私が学生時代を過ごした昭和から平成、令和へと時代は移り変わった。その間ずっと、今も変わらず、私の根底には「大濱流」の教育方針を続けていきたい、という思いがある。

もちろん、早朝から夜中までの研究を強制したり、さまざまな経済事情のある学生にアルバイトを禁じたりといった指導方法は今の時代にそぐわない。ただ、昼夜問わずに厳しい環境下で研究に専念できたことが、多くの論文や成果につながっていたことも事実。今の時代が全て悪いというのでは決していないが、もし、言うべきことも言えない、馴れ合いのような教育が主流になってしまうのであれば、研究活動の低迷を招くのではないか。大学の研究現場というマイクロレベルで起き得ることは日本社会全体でも起き得る。そしてそれは日本社会の停滞を招きかねないと、危惧している。

まして我々が身を置く建築の現場は、少しの気の緩みが重大事故につながりかねない危険を孕む厳しい現場だ。そういう現場で堂々と活躍できる学生を育てるためにも、一定の厳しさを保った指導が必要ではなかろうか。

民間企業での勤務を経て、日本大学工学部に助手として戻ってきてから約30年、「大濱

流」の教育方針を継続する私に対し、学生からは「厳しい、きつい」という声も「やりがいを感じられる」という声もある。時代の変遷とともに変えなければならない部分と、変えてはいけない部分。その兼ね合いに悩みながら、教育と向き合う日々を重ねている。

時代の変遷に伴い「変化」を感じることもう一つ。それは学生と教員、または教職員同士の交流の希薄さだ。かつてあった「助講会」や定例のボーリング大会といった交流の場はいつの間になくなり、特にコロナ禍を経て社会構造が大きく変わったことで「雑談」や「腹を割った話」をする機会が大幅に減った。それは単に宴席が減ったというだけの話ではなく、研究成果や学生への指導など多方面に影響を及ぼしている。

時代の変遷と大学教育方針

変えるべきものと、変えてはいけないもの

教授 サンジェイ パリーク

コロナ下では、色々な面で効率化が進んだ。例えば、急な国内外の出張時にもオンラインで授業をしたり、研究室の学生にリアルタイムで状況を確認しながら実験ができたりと、時間のロスが縮小された。その反面、一見、非効率に見えても、ちょっとした雑談から課題解決のヒントを見つけたり、成功や失敗の原因をざっくばらんに話して互いを理解し合いながら研究を進めたりといったことは難しくなったように思う。

学際的、超学際的な研究成果が求められる昨今にあって、学科をまたいだ交流により成果を得ていると実感する研究はいくつもある。例えば建築分野に身を置く我々が研究する「自己治癒コンクリート」は微生物やバクテリアを扱うため、生命応用化学の春木満先生の力を借りてこそディープな研究が続けられている。「コンクリート電池」の開発は電

気電子工学の江口卓弥先生と共同で取り組んでおり、「相変化材料」のエネルギー効率的な性能評価のために機械工学の宮岡大先生の協力を得ている。

かつて、倉田光春先生(工学部建築学科教授)の助手だった時代には、倉田研究室で共に新任教員で迎えた建築計画の浦部智義先生と共に、インド住宅の問題点や解決法を見いだすための現地調査や住宅設計を幾度も重ね、随所に提案していた。当時は振り返ってみても、教員同士の活発な交流があったおかげで、お互いに深い信頼関係を築くことができ、研究成果につながっていたと感じている。

日本大学工学部はいち地方にある大学だが、施設の面でも人の面でもとても良い研究環境が整っている。もっと研究分野や学科の枠を超えた教員同士の研究が活発になれば、より大きな成果を生み出せるのではないだろうか。そして普段から交流を活発にして気の置けない関係をつくっていくことが、その追い風になると思うのだ。

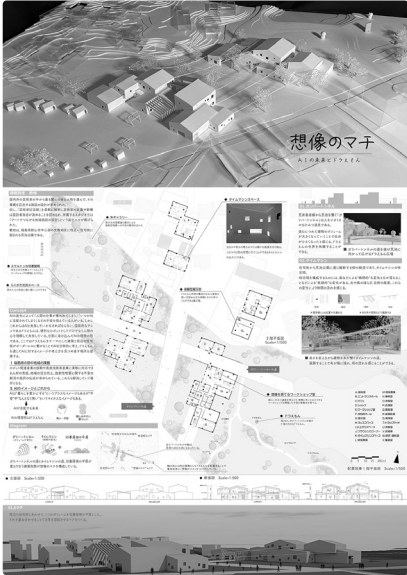
海外ではオランダ、インドやドイツ、国内では名古屋大や京都大、東北大など色々な大学と一緒に研究活動を進める中で、いち地方大学である日本大学工学部の強みを感じる機会が多い。学生諸君には、この恵まれた研究環境を最優先に使い研究に打ち込めるありがたみを、よく分かってほしいと、心から思う。せっかくの強みを「宝の持ち腐れ」にしてはいけない。

昔の時代が全て良くて、今が全て悪いと言うつもりはない。ただ、効率ばかりを求め、機械的に済ますことを良しとする昨今の風潮は、研究活動への熱量を奪い、成長を止めてしまうのではないかと危惧しているのだ。繰り返しになるが、時代の変遷とともに変えるべきもの、変えてはならないものもある。私はどんな時代にあっても、研究活動への熱量や人との絆といった自分の根底にあるものを、大切にしながら生きていきたいと思っている。皆さんはどう考えるだろうか。

第27回 JIA東北建築学生賞応募作品

JIA東北建築学生賞は(一社)日本建築家協会東北支部が主催する、東北地方の大学、高専、専門学校の建築学科に在籍する学生を対象としています。決まった課題が与えられるのではなく、各学校での授業課題として制作された作品で応募することが特徴です。本校からは例年、学内で選抜された4年生2名、3年生1名が出品をします。本年度は下記の3名の学生が選ばれ応募をしました。

三瓶 夏蓮(3年)
想像のマチ
AIの未来とドラえもん

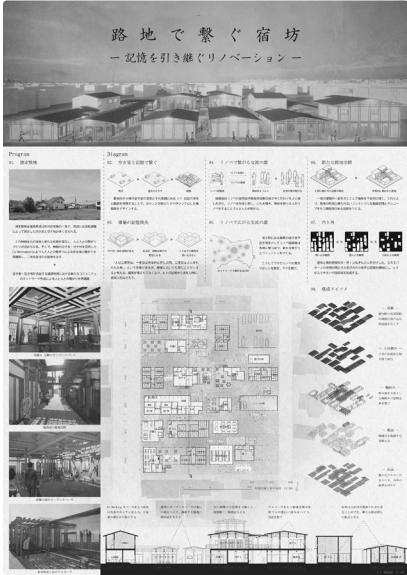


AIの進化によって“人間の仕事が奪われてしまう”、“いつかAIに支配されてしまう”などの不安を抱えている人がいる。しかし、これからはAIと共存していかなければならない。国民的なアニメであるドラえもんは、便利なロボットとしてだけではなく人間の心を理解して共存している。日常に溶け込んだAIの理想の形である。

この作品では、ドラえもんをテーマにした建築と周辺の住宅街がボーダーレスに繋がることでAIを日常的に考え、ドラえもんを通してAIに対するイメージや考え方を見つめ直す場所を提案する。

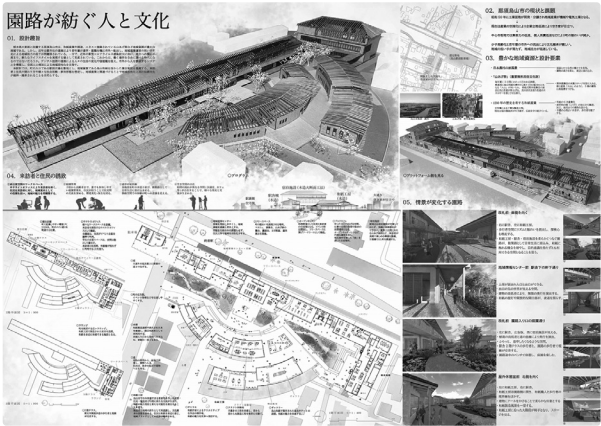
敷地には人を惹き込む2つの道が交差する。人のボリュームを変化させるドラえもんのひみつ道具「ガリバートンネル」の道と、タイムマシンの時空間のように時の流れを感じる道である。この2つの道と切妻屋根の平屋が重なり合う建築形態が想像のマチを構成している。

松田 啓稔(4年)
路地で繋ぐ宿坊
—記憶を引き継ぐ
リノベーション—



3.11からの復興は、避難者が多かった浪江町では大規模な開発も行われるなど、より一層進んでいる様にも見える。しかし、現実には、住民の帰還率が示す様に空き家や空き地も多く、暮らし再建の足取りは重い。そこで、本設計では、暮らしの基盤となる家とその敷地を再構成し、フクシマを変える建築を考えた。具体的には、選定したエリアにある、過去から引き継がれたモノとして空き家数軒を改修し核として残し、その周囲にある空き地に3.11以前にあった住宅の輪郭を再現させることで、本モノと記憶の形がシンクロした建築群をデザインする。また、かつて塀や生け垣があった敷地境界付近は、その建築群をつなぐ路地空間として再構成する。様々なカタチの路地空間は、3.11以前の空間の履歴とつながりながらも前向きにフクシマの町を変える建築となる。

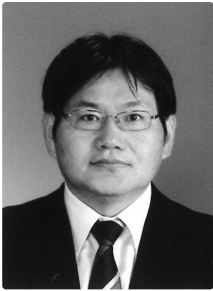
田端 萌美(4年)
園路が紡ぐ人と文化



栃木県那須烏山市は、和紙づくりの伝統的な産業、山あげ祭を代表とする文化の息づく地域資源が豊かな地域である。一方、若者の都市への転出により少子高齢化が進み、それらの衰退も懸念されている。本設計は、JR線終着駅で一定の利用者数がある割に、等閑感のある烏山駅とその駅前に着目し、その産業や文化も持続できる様な、地域活性化に資する建築を目指した。

プログラムは駅舎棟、宿泊施設、和紙工房の3つで構成され、各施設を庭園や広場と一体となった園路が柔らかく繋ぐことで、住民も来訪者も散歩感覚で入り込める設計とした。その移動空間では、職人が和紙を手漉く心地よい水音や、季節により変化する庭園を楽しむ。また、木組みの軒下通りや道幅の変化、曲線や建物の高低差による演出などで、歩行者に冒険心を持たせ、目的を持たずとも人々が往来し、その賑わいが町へも染み出すことを期待する。

新任紹介



非常勤講師：
荒牧 陽一

担当科目：
建築施工Ⅱ

今年度より非常勤講師として、施工Ⅱを担当いたします荒牧です。私は日本大学工学部建築学科卒業、日本大学工学研究科建築学専攻修了後、福島県内の建設会社に入社しました。社内においては主に現場施工管理を担当し、その後事業承継のため現在の会社に戻り、以来20年間施工の現場に従事してきました。現在は施工の現場だけでなく社内的業務をしながら、建設業を通して社会整備に貢献できるよう日々努力しています。

現在まで建築現場で携わった建物等は、企業の事務所や工場、公共施設、学校、鉄塔、店舗、病院、空港、住宅(新築、リフォーム)等です。

現在の建設業は他の産業と同様に将来的な人手不足を抱えながらも、デジタル技術の導入などにより、省力化が急速に進む一方で、墨出しや計測業務等の作業は相変わらず人手を必要とする部分がまだまだ多くあります。また、これからの施工現場もBIM活用やロボット化が急速に進み、今後大きく変わりつつあると思われます。そのような中で建築施工的視点から各種工事や管理方法にどのようにアプローチしていくかを学生の皆さんにできるだけ分かりやすく説明をしていきたいと思います。また、建設施設の作り手としての基本姿勢は、ユーザーの使い方にどのようにマッチングさせていくかにあると思ひ

ます。建物が完成した後にどのようにユーザーが使用していくかをイメージしながら、作り手側としての向き合い方も一緒に考えながら勉強していき、講義を進めていきたいと思います。

以前の建設業のイメージは3K(きつい、汚い、危険)と言われていましたが、現在は新3K(「給料が良い」「休暇が取れる」「希望が持てる」)というイメージを目指しており、施工現場を取り巻く環境も大きく変化しつつあります。

これまでの私自身の業務の内容を振り返りながら、改めて学生の皆さんと一緒に建築施工について考えてみようと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



非常勤講師：
畝森 泰行

担当科目：
建築設計演習Ⅳ

この度、日本大学の非常勤講師を勤めることになりました。東京で設計事務所を開設して14年、大学卒業後から数えると20年以上が経ちます。卒業後の修行時代や独立当初を振り返ると、もう同じことはできないなと思ってしまふほど激しく濃密な月日でした。

私たち建築家の仕事は、学生の頃には想像できなかったぐらい幅広くなりました。リノベーションが増え、建物を設計する以外にも、事業計画やまちづくりにつながるプロジェクトが多くなりました。プログラムも複合化し、お年寄りや子どもたち、子育て世代や障がい者など、様々な人に向けた建築も

求められています。そのため、私自身も協働で設計する機会が増え、他の事務所や異なる分野の専門家など、立場の異なる人たちと議論することが増えました。これらの変化は、決して建築の世界に限ったことではなく、社会全体の複雑さや多様化の表れであり、それは今後さらに進んでいくように思います。

一方で大学は、いつも緩やかに時間が流れていると感じます。私は他の大学でも非常勤講師を勤めていますが、どの大学もそれは同じで、というより今の時代に限らず私たちが学生の頃やその前の時代も時間の遅さは

きっと同じだったように思うのです。そういう時代を経ても変わらない大学生生活の普遍さは、動き続ける世の中に対して大変貴重な日々であり、昼夜を問わず友人と語り合い、将来を模索し、ひとり何かに没頭した経験が、きっとその後の原動力になるのではないでしょうか。

大学でのゆっくりとした時間に身を置くこと、またそこで物思いにふけ、皆さんと自由に想像することを楽しみにしています。と同時にそれは、私たちが持ちうるこの場所の大きな価値であり、次に向けた可能性のように思うのです。



非常勤講師：
滑田 崇志

担当科目：
建築設計計画特別実習

今年度より大学院の設計演習を担当する滑田崇志です。福島県南会津町で小規模なアトリエ系設計事務所を営んでいます。福島奥深い地域で活動していますが、僕の地元は四国・香川県の出身です。仙台の大学で、南会津町出身の芳賀沼整さんと出会ったことから、南会津に飛び込みました。芳賀沼さんは実質的な上司として、26歳の時に社長を仰せつかりました。浦部研の歴代のメンバーとも、約600戸の木造仮設住宅、天栄村の智恵子邸、葛尾村の復興交流館など様々なプロジェクトを協同してきました。

しかし、芳賀沼が2019年に亡くなります。よそものの僕たちが残されましたが、「標高700mで設計活動をする」とコンセプトで、場所を変えず再出発をしました。その後、機会にも恵まれて様々な受賞を頂くことができました(SDレビュー賞等)。

大学時代を振り返ると、真摯に研究に取り組む先生方、そして、純粋に建築のことを考える仲間がいること、それは貴重な時間でした。卒業設計の時には、賞は取れませんでした。卒業後、プロジェクトに向き合い、人との出会いを大切にすることで、自分の生きる場を見つけることができたと思

います。

今、人口が縮小し日本社会が大きく変わっていく時期です。これまでの知識が生かされにくい社会かもしれませんが、僕の経験は役に立たないけど、建築に向かう態度は共有できるのかと考えています。

皆さんが卒業後、社会にいる先輩方と、横に並んで共にプロジェクトに取り組まなければならない時代に来ています。「社会という荒野を仲間と共に生きる」(宮台真司)という言葉があります。この演習を通して、社会問題に向かい荒野の中で生きていく建築人(仲間)を増やしたいと願っています。

研究発表／教室ニュース

学術論文

- 高橋岳志「地域材を使用した木造建築物計画の取組体制——郡山ヘアメイクカレッジを事例にして——」
日本建築学会地域施設計画研究 41, pp.121-126, 2023年7月
- 浦部智義・高木義典・滑田崇志・宮崎渉・作山和輝・伊藤和輝「葛尾村復興交流館の設計・計画とその活用——産官学民協働による拠点づくり——」
日本建築学会地域施設計画研究 41, pp.223-228, 2023年7月
- 山田義文「高齢者施設における建築特性と災害発生時の避難計画に関する研究——山形県内の特別養護老人ホームを対象として——」
日本建築学会地域施設計画研究 41, pp.357-366, 2023年7月

2023年度日本建築学会大会(近畿)

会期:2023年9月12~15日

会場:京都大学

- 吸水調整材塗布後ポリマーセメントモルタルで被覆するコンクリート表面被覆工法におけるコンクリートの中性化抵抗性に及ぼすそれらの塗布量及び被覆厚さの影響
……………○西陸登・齋藤俊克・出村克宣
- 再乳化形粉末樹脂を用いたポリマーセメントモルタルの電気抵抗率と含水率の関係に関する一考察
……………○荒木裕人・齋藤俊克・出村克宣
- ポリマー混入ポーラスコンクリートの静弾性係数推定のためのポリマー混入係数の検討
……………○田中秀暉・齋藤俊克・出村克宣
- 現存天守を対象とした火災安全性の研究 その1 火災時の煙流動性状解析
……………○佐藤小百合・森山修治
- 現存天守を対象とした火災安全性の研究 その2 階段歩行実験結果および安全性評価
……………○森山修治・佐藤小百合
- 病児保育施設の運営方法と空間利用に関する研究 福島県郡山市の医療施設併設型を対象として
……………○霜島奈夏子・宮崎渉
- 特別支援学級におけるオープンスペースの活用実態に関する研究 その1 オープンスペースから読み解くインクルーシブ教育を実現する教室配置形態の分析
……………○加藤大輝・山田義文
- 市民に開かれた庁舎における屋外空間に関する研究 広場とアプローチが担う開放性
……………○吉澤伊代・市岡綾子
- 福島県内の興行場法登録の実態に関する研究 興行場法登録から見た公立文化施設に関する研究 その1
……………○申銘規・浦部智義・榎本祐希
- 福島県内の興行場と公立文化施設の関係性の分析 興行場法登録から見た公立文化施設に関する研究 その2
……………○榎本祐希・浦部智義・申銘規
- けんしん郡山文化センターを対象とした調査分析 公立文化施設の改修履歴に関する研究 その1
……………○西澤舜介・浦部智義・樋口卓史

- 1970年代以降の丸太組構法の推移の分析 日本における丸太組構法に関する研究 その1
……………○結城諒真・浦部智義・渡邊洋一・高木義典
- セルフリノベーションによる空き家の利活用の課題と可能性に関する研究 その2 学生主体のDIYワークショップの概要
……………○高坂玲音・山田義文
- セルフリノベーションによる空き家の利活用の課題と可能性に関する研究 その3 学生主体のDIYワークショップが及ぼすワークショップ参加者と地域への効果と可能性について
……………○山田義文・高坂玲音
- 山形県に現存する地歌舞伎の近年の動向調査 東北地方に現存し歴史を持つ劇場空間の実態と役割についての研究 その10
……………○伊藤響介・浦部智義・渡邊洋一・高木義典
- 廃業宿泊施設の転用事例に関する研究 福島市土湯温泉を対象として
……………○福田健人・宮崎渉
- 3Dプリンターによるジオラマ模型制作の有効性 白河市中心市街地の景観構造模型
……………○横井誉大・市岡綾子
- 中世南奥州(福島県)における大工技術の継承と蓄積
……………○山岸吉弘
- 建築士制度の運用について
……………○速水清孝
- 商業捕鯨再開における捕鯨業の現状と地域活性化に関する研究
……………○長坂建志・山本和清・宮崎渉
- 細胞の振動特性に関する基礎的研究 テンセグリティ構造を用いた細胞のゆらぎの解析
……………○矢島竜成・ブンタラ ガン
- ジオポリマーで被覆した木質複合部における施工性・力学特性・耐火性の評価 その1 調合設計と曲げ試験
……………○田野・織田英樹・鈴木裕介・谷口与史也・バリーク サンジェイ
- ジオポリマーで被覆した木質複合部における施工性・力学特性・耐火性の評価 その2 燃焼試験と耐火性の評価
……………○織田英樹(大阪市立大)・田野・鈴木裕介・谷口与史也・バリーク サンジェイ
- FEM解析と現行の設計式に基づく曲げ圧縮破壊する鉄

筋コンクリート梁の構造性能評価

- ……………○新田太一・堀川真之
- 福島県沖地震の災害復旧調査を通じたRC造非構造部材の補修実態に関する一考察
……………○佐藤温起・堀川真之
- 準寒冷地におけるログハウス入れ子構造の蓄熱効果に関する研究 その2 「部屋の家・針生の箱2」夏期の室内温熱環境の実測調査
……………○宮岡大・浦部智義・長内勇樹・滑田崇志・高木義典

17th International Congress

on Polymers in Concrete (ICPIC 2023)

会期:2023年9月17~20日

会場:Warsaw University of Technology

(オンラインのハイブリッド開催)

● Effect of Polymer Content on Properties of Polymer Cement Mortar
……………○K. Demura, T. Saito

日本福祉のまちづくり学会第26回全国大会

会期:2023年9月30日~10月1日

会場:宇都宮大学

- 過疎化が進む地域における高齢者のバリア調査——福島県南相馬市原町区を対象として——
……………○伊藤真実・山田義文
 - 特別支援学級におけるオープンスペースの活用実態に関する研究 その2 ——学級配置特性とOSの型別によるOS面積の比較——
……………○加藤大輝・山田義文
 - 公共施設内の車椅子使用者用便房における空間寸法の実態調査——福島県郡山市の特別特定建築物について——
……………○山田義文・高坂玲音
 - 車椅子使用者用便房の空間寸法可変型実寸モデルの構築に関する研究
……………○高坂玲音・山田義文
 - 公共施設内の車椅子使用者用便房内空間における有効性と課題に関する研究
……………○高坂玲音・山田義文
- 日本インテリア学会大会
- 会期:2023年10月28~29日 | 会場:名古屋工業大学
- 開かれた庁舎建築に関する研究——半屋外空間の宴客——
……………○吉澤伊代・市岡綾子

学会発表

教室ニュース

- 市岡綾子専任講師は、6月22日に福島市よりあい認定こども園(仮称)整備事業基本設計者選定審査委員会委員を委嘱され、委員長に選出された。
- 山田義文准教授は、7月1日に郡山地方広域消防組合より郡山地方広域消防組合行政不服審査会委員を委嘱された。
- 伊藤響介さん・小原隼さん・西澤舜介さん・樺山拓也さん・結城諒真さん(浦部研M2)は、7月1日に阿部佳穂さん(浦部研卒、間・空間設計)と協働で制作した作品「聖俗——参道につながる歩道橋——」を日本建築構造技術者協会東北支部主催の第9回構造デザインコンテストに応募し優秀賞を受賞した。
- 市岡綾子専任講師は、7月1日に福島県より土木部指定管理者選定検討会(都市)委員を再度委嘱された。
- 山田義文准教授は、7月12日に郡山市より郡山市市民協働のまちづくり推進協議会委員を委嘱された。
- 浦部智義教授は、7月18~27日に「令和5年度大学シーズマッチング会 in 日本大学」として「縦ログ・パネルログ構法」と題した講演を行った。
- 市岡綾子専任講師は、7月21日に福島県より福島県公

- 有財産審議会委員を委嘱された。
- 浦部智義教授は、7月27日に葛尾村・10月11日に富岡町で行われた福島国際研究教育機構(F-REI: エフレイ)との研究・活動等の懇談会に出席した。
- 市岡綾子専任講師は、9月1日に二本松市より二本松城跡総合整備事業事後評価委員会委員を委嘱された。
- 市岡綾子専任講師と市岡研究室はか学生有志は、9月5日、25日に白河市立白河第一小学校6年生を対象とした景観学習の支援活動を行った。
- 富岡町にオープンした「とみおかワーキングベース」の看板並びにパンフレットデザインに協力した小柳陽菜子さん、加藤涼さん、齋藤あずささん(市岡研4年次生)は、9月11日に監修した市岡専任講師とともにオープニングセレモニーに参加した。
- 市岡綾子専任講師と市岡研究室はか学生有志は、9月21日、10月5日に白河市立みさか小学校4年生を対象とした景観学習の支援活動を行った。
- 浦部智義教授は、9月26日に富岡町で行われた「富岡パネル工場開所式」に出席し「タテログ推進協議会」の発起人として「タテログの推移とその将来」と題して基調講演を行った。

- 廣田篤彦教授は、10月2日に喜多方市より都市計画審議会委員を委嘱され会長に選出された。
- 浦部智義教授と浦部研究室は、10月3日に富岡町文化交流センターで行われた福島相双復興推進機構主催の第2回まちづくりワークショップ「富岡地区」に参加した。
- 市岡綾子専任講師は、10月12日に白河市より白河市複合施設管理運営計画検討委員会委員を委嘱され、会長に選出された。
- 田端萌美さん(浦部研4年)は、10月20日に行われた第27回JIA東北建築学生賞において作品名「遠路が結ぐ人と文化」で最優秀賞を受賞した(他、浦部研3年の三瓶夏蓮さんが作品名「想像のまち」で特別賞)。
- 吉澤伊代さん(市岡研-M2)は、10月29日に日本インテリア学会第35回大会にて学生優秀発表賞を受賞された。
- 市岡綾子専任講師は、10月30日に白河市より白河市景観審議会委員を再度委嘱され、会長に選出された。
- 市岡綾子専任講師は、ふくしま「ユニバーサルデザイン」メールマガジン第149号(10月30日発行)に寄稿された。

編集後記:自らの力量を試す場として、様々な学生コンペが開催されます。設計競技というように、他の作品と競い合い順位を決める仕組みは、講義とは少し違った興奮があります。今号では3名の素晴らしい作品を掲載しています。(山岸)

お願い:編集室までご意見・感想をお寄せください。
ceb.soukon@nihon-u.ac.jp